

道真公の無念を晴らす朝日嶽修験 祝瓶山

●長井市にとても美味しいカレー屋さんを見つけて、週に一度4週続けて通い、全8種類（妻と共に）を堪能させていただいた。このような特異な現象が起きた時は「その近くを調べなさい」という知らせ。長井市といえば朝日連峰の一つ「祝瓶山」とすぐにピンときた。怨霊菅原道真が藤原家を襲った祭祀線では、祝瓶山が大切な役割をしている。（詳しくは「藤原家を襲った菅原道真」を）いつか調べなければと思いつつ保留にしてしまっていたのだ。



■祝瓶山（いわいがめやま）

祝瓶山は朝日山地の主峰・大朝日岳から南南西に伸びる山稜の上に位置している。標高は1500mにも満たないが、岩陵が発達する極めて峻険な山容を示す。このことから、俗に東北のマッターホルンとも呼ばれる。祝瓶山の北稜部が磐梯朝日国立公園の出羽三山・朝日地域に含まれている。なお、祝瓶山は、地質学的には朝日山地のほかの山と同様に花崗岩を中心とした深成岩からなる山である。



サイト やまがた山さんより拝借

■五所神社（伝わる朝日岳信仰の由来）

由緒

五所神社縁起書によれば、天武天皇の治世、白鳳8年（7世紀末）、朝日嶽、岩上嶽（祝瓶山）に役行者が参籠修行し開山したという。その後、聖武天皇の治世、天平3年（731年）、川口寺が建立され、宝亀5年（774年）桑沢口に岩上寺が建立され繁栄し、その繁栄は約400年続いた。天喜年間（1053年 - 1058年）、前九年の役（源義家と、安倍貞任の兵乱）により朝日、岩上の靈地は衰退の一途をたどっていた。

その後、再び出羽国を訪れた源義家は、寛治4年（1090年）当麻秀則を遣わし、祭地青木野に朝日岳大日靈貴命・月ヶ峰月読命・岩上別雷神・小朝日金山彦命・三渕建御名方命の五ヶ所の尊靈を移し合祭したのが朝日山五所大明神である。この時から地名も五祭所と改められ、一郷の産土氏神として奉斎し、当麻秀則に永く留ませ、祠を守らせたとある。



伝承

五所神社には三渕（みぶち）の神が祀られている。『卯の花姫伝説』では、前九年の役で敗れた悲運の武将、安倍貞任の娘、卯の花姫が三渕の滝に身を投げ、龍神となって祀られたものといわれている。長井市では約40の神社において勇壮な黒獅子祭が行われている。寺泉五所神社の黒獅子祭の時には、この龍神が雨を降らせ、最上川支流の野川を、波飛沫をあげて下ってくるといわれる。その姿を演じたものが黒獅子舞といわれ、伝承のごとく黒獅子舞の10メートルもの大幕には水流の激しさを表す水玉の波

飛沫と波模様が染め描かれている。

修験

東北地方では神社の祭祀に修験者が関わってきた例が多く見られ、五所神社も古くから代々、修験東性院が別当として祭祀に関わってきた。羽黒派十二先達の一である東性院は天長年間（824年 - 834年）に寺泉村の道者屋敷に、朝日山別当の岩上寺を開いた宥善法師を開基とし、明治初年の神仏判然令の影響下、明治3年（1870年）に復飾し神主となった永恭まで、46代にわたって相続してきたと伝えられている。中世、朝日岳を中心に朝日修験が盛んであったが、羽黒修験との勢力争いに敗れ、衰退したと思われる。鎌倉時代、朝日山地周辺には、平氏の残党などが山伏となり、横暴を極めたので、北条氏が千年封じを実施したとの伝説がある。その際に、僧坊を破壊、仏像を川に投棄するなどの弾圧により朝日山地の信仰は衰え、朝日修験の勢力も弱体化したと言われている。東性院も、朝日山五所大明神の別当を代々務めてきていたことから、当初は朝日修験であったものが、時代を下るなかで羽黒修験となつたものと考えられる。

●朝日岳岩上山由来記と同じ内容の五所神社由緒。祝瓶山は大朝日岳と同じピラミナルな山容をなしていて、小ピラミッドの祝瓶山から大ピラミッドの大朝日岳を望む祭祀が行われていた。実際に山頂付近には祭祀跡があるらしい。ただ、こんなに由緒ある五所神社なのに繋がる祭祀線が見つからない。源義家がわざと適当な場所に総合的な神社を作り朝日岳の神々とつながらないしくみをつくったのだろうか。

●驚いたのは、出雲王家の皇子だった大彦（長髓彦）の子孫の安倍貞任の娘 卵の花姫が三渕の滝に身を投げ、龍神となって祀られたとある。貞任といえば岩手の印象だが、東北全体に日高見王国の領地を持っていたのだろうか。「朝日」と付く地名は出雲族が朝の昇る太陽を拝んでいた場所らしい。安倍家も朝日岳信仰に関わっていた証ではないだろうか。

卵の花姫のことを調べていると、現在も祭事をしている總宮神社が見つかった。驚いた。征夷大將軍坂上田村麻呂の創建である。しかし、宮司さんの姓はなぜか安部!? しかもカレー屋さんのすぐそば。さらに、すぐ隣には行基が開いたとされる遍照寺もあってときめいた。まずは總宮神社を調べて見た。

■總宮神社（そうみやじんじゃ）

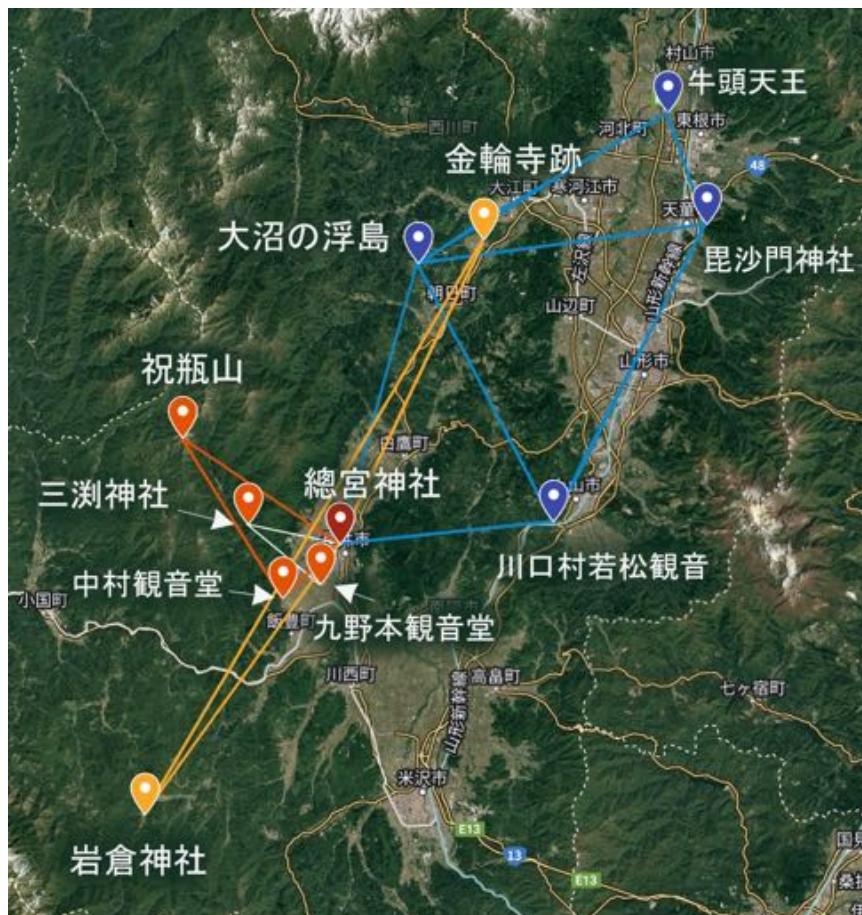
創建は延暦21年（802年）、坂上田村麻呂が東征の際に赤崩山白鳥大明神を祀ったのが始まりとされる。康平6年（1063年）に源頼義が社殿再建、文禄2年（1593年）に蒲生氏郷・蒲生郷安によって長井郷44ヶ村の神社が合祀され、「總宮」と称されるようになった。また、直江兼続が参拝の際に手植えしたとされる9本の大杉と、奉獻した刀剣が今も残っている。

祭神 日本武尊 合殿 大己貴命 天児屋根命 倉稻魂命
山形県長井市横町14-24



●参拝後に「みくじ筒」を振り出したら第一番の大吉が出た。「1番はめったに出ませんよ」と。探し物はいずれ見つかると書いてあった。

總宮神社



●祝瓶山とのつながり

■總宮神社（本殿） →→ 16.366km →→ 祝瓶山（三角点） →→→ 16.366km →→ 中村觀音堂

■中村觀音堂

松尾山天養寺は山形県西置賜郡飯豊町大字中に境内を構えている真言宗の寺院です。天養寺の創建は不詳ですが平安時代に開かれた飯豊町最古の寺院とされ、伝承によると、最初の伽藍は大同年間（806～809）に飛騨の匠が一日で建てたと伝えられています。本尊の木造聖観音像の特徴も平安時代後期と推定され、その頃に創建されたと思われます。度々火災により伽藍が焼失し記録なども失われ昭和22年（1947）の火災では観音堂以外の建物が完全に焼失しています。

置賜三十三観音霊場第4番札所

本尊：聖観世音菩薩 山号：松尾山。寺号：天養寺。宗派：真言宗。

西置賜郡飯豊町中1956



●最初の伽藍は大同年間（806～809）と伝わり、總宮神社の802年創建とほぼ同じ時。ここも坂上田村麻呂開基かもしれない。

●大沼の浮島とのつながり

■總宮神社 →→25.051km→→→ 大沼の浮島（弁天島） →→→ 25.051km→→ 川口若松觀音
→→→ 25.051km→→ 毘沙門神社
→→→ 25.051km→→ 牛頭天王

■大沼の浮島 弁天島（出島）

湖畔にある大沼浮嶋稻荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳 9 年（681）役の小角（役の証覚・役の行者）が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稻荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行なわれた。建久 4 年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。山形県西村山郡朝日町大沼



備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。しかも波を立てずに動く。出雲族東王家の富家の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富權現（弁財天）」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稻荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稻荷よりも古い歴史になってしまう。730 年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天（瀬織津姫）から稻荷神に変えたのだと思われる。徐福も連れてきた海童たち（秦族）も蓬萊島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相當に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稻荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「弁天島（出島）」（写真）が起点となっている。

大沼浮島は、全国に散らばる浮島神社の総本宮ではないか。そして、多くの神社の神池に浮島のごとく島が作られ弁財天や市杵島姫（瀬織津姫）が祀られているのも本来はこの分社だったのではないだろうか。池に囲まれた古墳すらも浮島に見えてくる。古代史を探る時、きっと浮島信仰は重要な鍵になると思われる。

■川口村若松觀音

詳細不明。上山三十三觀音第五番。上山市川口 8 2



■毘沙門神社 詳細不明 天童市山元

■牛頭天王 詳細不明 東根市松沢 4 0 - 1

牛頭天王

●お堂に入り参拝していたら、突然ものすごい音とともに風が吹きまくって驚いた。牛頭天王にお祓いしてもらったように感じた。

●三淵神社とのつながり

■總宮神社 →→8.124km→→ 三淵神社（推定）→→→ 8.124km→→ 九野本觀音堂

■三淵神社跡地

總宮神社の奥の院。ダムに沈むために近くの高台に移された。

今から約 1000 年前、安倍貞任・宗任兄弟を討つため源頼義とその長男の義家（八幡太郎義家）が東北地方に攻め入りました。貞任は、娘である「卯の花姫」と一族を送り、長井を守らせました。

しかし、卯の花姫は敵である義家に恋をしていました。義家は、貞任・宗任を手強い相手と知り、ひそかに卯の花姫にたくさん手紙を送りました。手紙には、貞任が降伏すれば貞任の身の安全を保障することや戦の後に結婚を約束することが書かれていました。卯の花姫は戦を早く終わらせたい思いから、義家に貞任の戦略を漏らしてしまいます。しかし、これは戦略を聞き出すための義家の作戦だったので。戦略を聞き出すことに成功した義家は、各地での戦で勝利を収め、ついに貞任を戦死に追い込みました。そして、貞任の戦死後、義家からの手紙はぱつとりと切れてしまいました。



貞任の戦死の知らせを聞いた姫は、義家に騙されたことに気付き「父を殺したのは私だった」と涙を流し大いに嘆きました。悲しみも束の間、義家軍は長井郷へと攻め込んできました。安部軍は大軍にこられかね、朝日岩上の僧侶達を頼るしかないと、姫は三淵を訪れ、神に祈りを捧げました。しかし、義家の大軍に取り囲まれたことを知ると「もはやこれまで…」と数十丈の岩の絶壁から三淵へ身を投げました。すると卯の花姫は龍神となり、三淵の水神様となりました。

總宮神社の奥の院である三淵の主は竜神で、9月の例大祭の際には奥の院の竜神が野川の水に乗って神社へ下ると伝えられており、黒獅子はその化身だといわれています。

■九野本觀音堂

九野本觀音の創建は寛文 8 年（1668）、当地の実力者だった梅津萬右衛門により開かれたのが始まりとされます。現在の觀音堂は天保 9 年（1838）の火災で焼失後の嘉永 7 年（1854）に再建されたもので宝形造、鉄板葺、桁行 3 間、梁間 2 間、正面 1 間向拝付、外壁は真壁造、素木板張、花頭窓付、向拝木鼻には獅子と象の彫刻が施されています。本尊の十一面觀世音菩薩像は像高 35 cm、伝教大師最澄が自ら彫刻したものと伝えられています。境内には天保 14 年（1838）の 50 年回忌に建立された芭蕉句碑があり元禄 4 年（1691）に詠まれた「手を拍ては こたまに明くる 夏の月」の句が刻まれています。置賜三十三觀音靈場第 5 番札所 本尊：十一面觀世音菩薩
長井市九野本 2047

●總宮神社の宮司さんのブログ「ぐうじののほほん」で三淵神社に参拝に行く様子が写真で紹介されていた。その中で、「ダムに沈む前の三淵神社は立ち枯れした杉の木の所にあった」と説明してある。よく見ると沢が入り込んでいる所だったので、グーグルの写真地図と照らし合わせて場所を特定した。おそらく当たっているはず。すると、長井市九野本觀音堂と繋がったが、創建は寛文 8 年（1668）。残念ながら古い祭祀線ではなかった…。ただ、その時代を調べてみると、江戸幕府の政治が安定し文化が発展した時代で、歌舞伎や淨瑠璃といった芸能が発展し、庶民文化が隆盛を迎えていたらしい。また、各

地で神社仏閣の造営や修理が行われ、文化財が整備されたと。

実は調べて見ると岩手や秋田にも貞任の娘の伝説は似たような話でいくつも残っている。「エム・システムのブログ」さんが、奥州安倍氏の伝説 - 実は生き延びていた編(その3)で、まとめて紹介してある。なにより、史実では貞任に娘はいなかったのだそうだ。もしかしたら、瞽女や祭文語りなどが各地に同じ物語を広めたのではないだろうか。貞任伝説の歌舞伎もあったらしい。きっと長井市でも、度々荒れ狂った野川の大蛇伝説と合わせた卯の花姫伝説が創作され、いつしか本当の伝説になり、總宮神社の奥の院の由来として取り込まれたのではないだろうか…。そして九野本観音堂

堂が卯の花姫の鎮魂のために建立された…。ごめんなさい。夢のない話です… (汗)。



●さて、怨霊菅原道真が山形の祝瓶山使って清涼殿に雷を落とした事件の有力な裏付けともとれる興味深い祭祀線が見つかった…。と思った。



■岩倉神社 →→ 28.903km →→→ 總宮神社 →→→ 28.903km →→ 大谷金輪寺

■岩倉神社

祭神/日本武之命 吉より飯豊山不動院岩蔵寺と称され諸大名の武運長久祈願所として信仰されてきましたが明治になって岩倉神社となりました。本堂は木造不動明王立像で、高さ 142.3cm、町内第二の大きな寄立作りの仏像です。室町初期の作と言われ町指定文化財になっています。



岩倉神社は飯豊山の麓にあり、かつて飯豊山信仰の入口の役割を担った場所です。江戸時代後期、南東北では飯豊山信仰が盛んになり飯豊山の山頂をめざす人々が各地から訪れました。登山者は岩倉村の宿に一泊し、岩倉神社に参拝して身を清めてから山へ入ることっていました。

現在は樹齢 400 余年ともいわれる杉に囲まれ、静かで穏やかな空気に満たされています。アジサイの咲く季節、境内一面が苔に覆われ、美しい緑の神域となります。

明治以前、岩倉神社はお寺でもありました。よって現在も仏像が祀られています。

本堂には青い体に赤い火炎光背と衣を纏う色鮮やかな不動明王像、入口の仁王門には赤い体に多彩な文様を描いた衣服を纏う仁王像が祀られています。仁王像はお寺の領域の守護を担うことから、筋骨隆々、あちこちに体毛が描かれており、とても力強い姿をしています。仁王様は足の守護仏でもあります。飯豊山に登る人が増えるに従って、参拝者が登山中の足腰の無事を祈るために祀られたものと考えられます。

飯豊山信仰

羽黒信仰の一部に属し、それに追従したものとの説があり、信仰形態やその習俗等から見てうなづけるものがある。また、山伏（法印）たちは羽黒山修験と類似したところの多い飯豊山信仰を、その土地に合うように信仰の形態を整えていったのではないだろうか。 飯豊山が信仰の山として開かれだるのは、山形県側資料によると、平安時代の後期、永保（1081-1083）の頃、知穎、南海の二憎によってはじめて中津川山道が聞かれたと伝えられているが、福島県側の資料によれば、白雄三（652）年、知道和尚と役小角が飯豊山に登り、山容より飯豊山（伊比天山）と名づけて五王子を祀ったという。

■大谷金輪寺 朝日町史「朝日岳信仰」より

川西町上小松にある真言宗大円寺に『朝日嶽縁起』は朝日岳信仰の内容が文章化されている。朝日嶽三所権現の縁起をのべ、三社が大富・女躰・子守の各権現で、本地仏はそれぞれ弁才天・大日如来・正觀音であるとする。文末の古老の伝承はともかく、弘仁年間（810～824）に教旻という僧侶が、朝日山麓の大谷に来往して、朝日岳金輪寺を建立し、周辺には朝日三十三坊と呼ばれる宗教集落が成立したという記録は検討されなければならない。

この縁起を書いた行賢は、大円寺の世代記によると、中興開基から数えて十四代に当たり、永禄二年（1559）12月に没したと記されている。同寺にある他の記録によると、先祖は大谷の金輪寺住僧で、朝日岳三社権現の別当職を勤めていた。ところが永正年中（1504～21）に金輪寺が坊舎も含めて焼失し、再建居住が困難のため、天文年中（1532～55）行賢が上小松村の龜森天神別当の院跡へ移ったという。朝日岳権現の祭礼は、古くは7・8月に行なっていたが、麓大谷の居住を離れたため例年の

八月はできなくなり、10年に一度の登山を行い、三社権現の祭礼は八月一日から七日まで亀森山の社中で勤仕している旨を記している。

この文書には「朝日嶽三社大富・女軀・子守権現、従往古堂社無之靈地ニ候」と書いて、別当寺金輪寺はあるものの朝日岳三社は、社殿を持たなかったとしている。

●大谷金輪寺については、別頁「朝日嶽信仰 大谷金輪寺・大圓寺・平圓寺はどこ?」をご覧いただきたい。

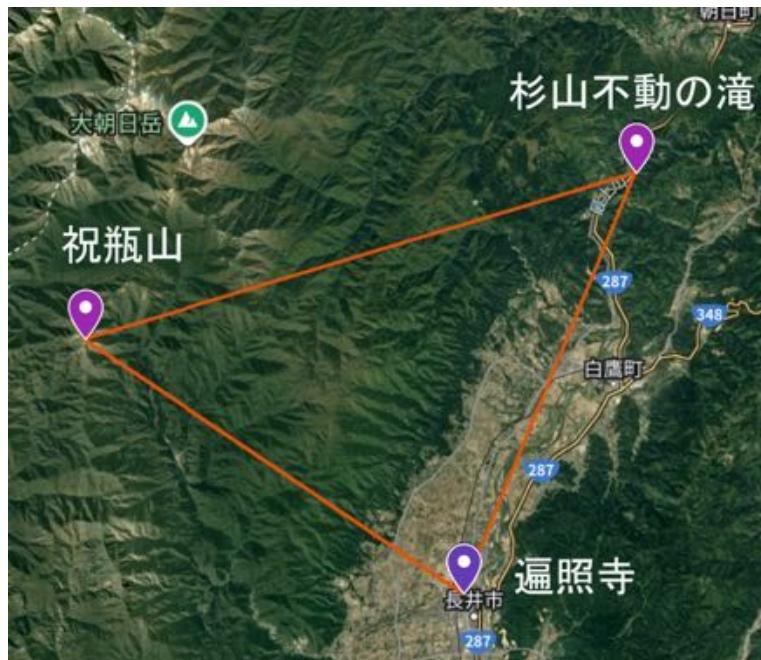
●なんと! 飯豊山信仰の拠点だった岩倉神社と、朝日岳信仰の拠点だった大谷金輪寺と同じ距離に総宮神社は存在している。同じく朝日岳信仰のもう一つの拠点だった大沼の浮島ともつながっているから、飯豊山・朝日岳の両方からエネルギーをチャージして総宮神社から祝瓶山に送り込む祭祀線に思えて鳥肌が立った。ところが残念。飯豊山信仰の飯豊側の開山が1081年頃なら清涼殿落雷事件よりも150年も後になってしまう。とはいえ、それ以降、鎌倉時代までの隆盛期は大いに役立った祭祀線といえる。



●鎌倉時代、なぜか頼朝の右腕だった大江広元がこのあたりを領地にしている。広元は大朝日岳のある寒河江荘を、息子の時弘は祝瓶山や飯豊山のある長井荘を領地にした。大江家は菅原氏と同じ土師氏の野見宿禰の血を引く。理由はこの大切なしきみがあるからだと思えてならない。

●次は総宮神社よりも古い歴史を持つ遍照寺を調べてみることに。ところが…

遍照寺



■祝瓶山 →→ 16.453km →→→ 遍照寺 →→→ 16.453km →→ 杉山不動滝

■金剛山遍照寺

8世紀中頃に行基菩薩が開いたと伝えられています。文治の乱(1189年)の時、中尊寺の祥乗が戦乱をさけて遍照寺に入ったといい、「奥の高野」とも呼ばれた古刹です。永享年中(1492年~)、名僧宥日上人が盛り立て、中興開山といわれています。江戸時代に入ってからも、日瑜・宥諦・諦真・宥謙らが地域の発展に力を尽くし、明治初めには38の末寺をかかえる大寺院であり、そして現在も置賜地方を代表する名刹です。



西置賜郡飯豊町中1956

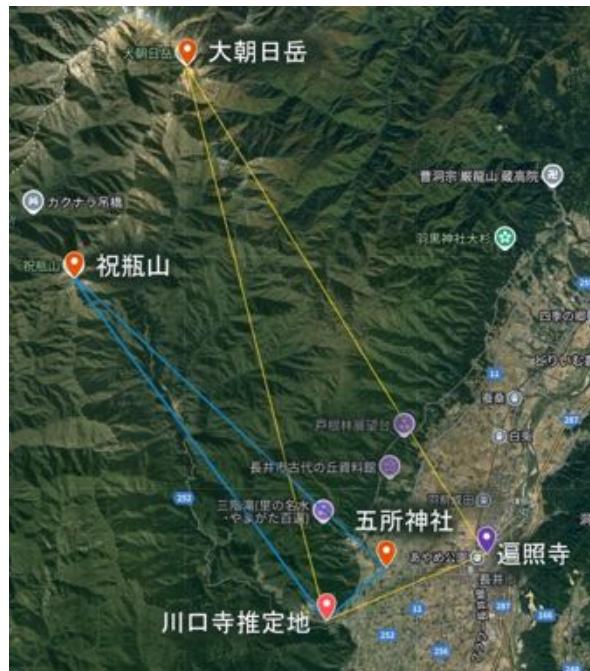
■杉山不動の滝 詳細不明 朝日町杉山



●行基が開いたのならば祭祀線はいくつも簡単に探せると思ったが、不思議なことに一つしか探せなかった。落胆したが、探せない理由は川口寺や岩上寺が現存していないからだと気づいた。

川口寺跡地

●調べた地図上の祭祀線の円を、消さずにいくつも重ねていたら寺泉地区の野川のほとりに交差する場所が見つかった。もしかしたら五所神社が伝える川口寺ではないかとピンときた。五所神社縁起書によれば、天武天皇の治世、白鳳8年（7世紀末）、朝日嶽、岩上嶽（祝瓶山）に役行者が開山し、その後、聖武天皇の治世、天平3年（731年）、川口寺が建立され、宝亀5年（774年）桑沢口に岩上寺が建立され繁栄し、その繁栄は約400年続いたとある。さっそく調べてみた。すると…



- 五所神社 →→ 14.142km →→→ 祝瓶山 →→→ 14.142km →→ 川口寺推定地
- 遍照寺 →→ 18.977km →→→ 大朝日岳 →→→ 18.977km →→ 川口寺推定地

■大朝日岳（朝日連峰・朝日岳）

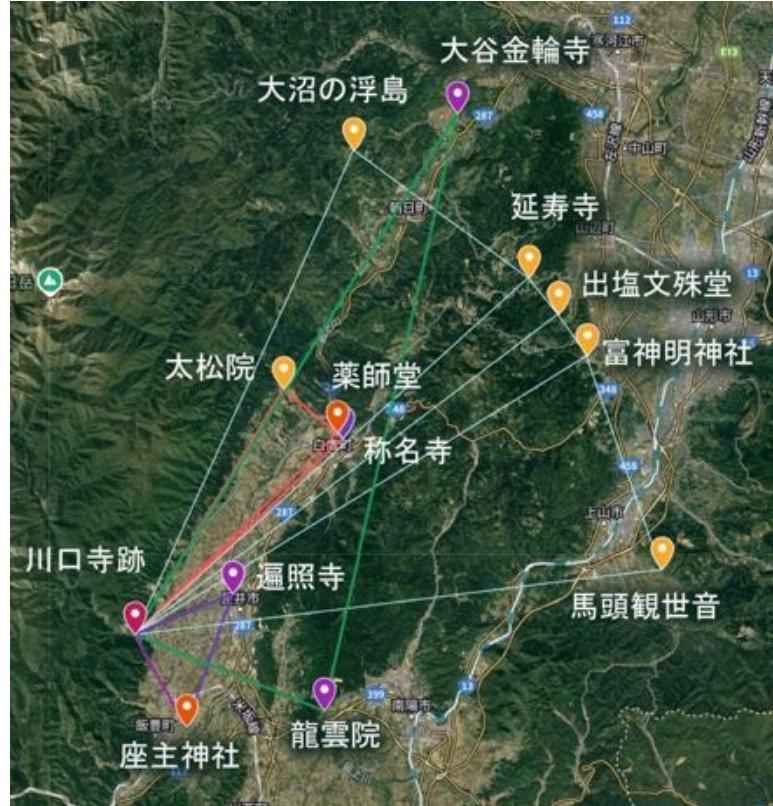
磐梯朝日国立公園の朝日連峰主峰。五所神社縁起書によれば、天武天皇の治世、白鳳8年（7世紀末）、朝日嶽、岩上嶽（祝瓶山）に役行者が参籠修行し開山したという。『三大実録』には「出羽国の白盤神と須波神に從五位下を授けた」とあり、須波神は朝日岳のことで龍蛇神の諏訪神とされる。大円寺『朝日嶽縁起』（1505年）によると朝日嶽大富権現は、大富権現・女躰権限・子守権現の三処であり、本地佛は、大富権現は弁財



天（初顕神は大山祇神）、女躰権現は大日如来（木花咲耶姫命）、子守権現は正觀音で大山祇神の娘溝織姫命であるとする。役の小角が出逢った女神は女躰権現。「朝日嶽信仰」は執權北条時頼（1246～56）によって千年封じられたまま現在に至る。山形県西村山郡朝日町。

備考/朝日と名のつく場所は、太陽信仰の古代出雲族が朝日を遙拝した場所とされている。

●祭祀線が探し難かった五所神社と遍照寺に見事につながった！ そして祝瓶山と大朝日岳に。
行基が遍照寺を開基したのは8世紀中頃。川口寺が建立されたのは宝亀5年（774年）。川口寺は遍照寺とつながる位置に。五所神社は川口寺と繋がる位置に建立された。理想的な祭祀線が見えてきた。もし本当にここが川口寺跡なら、ほかにも祭祀線は見つかるはず。さらなる信憑性を求めて調べてみた。
すると…



■遍照寺 →→ 5.769km →→ 川口寺推定地 →→ 5.769km →→ 座主神社

■座主神社

祭神：座主權現

座主神社は下椿地区で「御座主様」とよばれ、土地を守る神様として祭られています。かつて地元の有力者である梅津家の屋敷に祭られていた氏神を、天文2年(1533)に現在の場所へ移築したものです。この獅子頭は涌沼神社の獅子頭と兄弟獅子であるといわれています。そして戦時中でも例祭の奉納獅子舞を絶やすことなく行ってきた神社です。



●すぐ近くに大屋根のお宅にも同距離ラインが通っている。ここが有力者の梅津家ではないだろうか。

■太松院 →→15.605km→→→ 川口寺推定地 →→→ 15.605km→→ 称名寺
→→→ 15.605km→→ 薬師堂

■称名寺

称名寺は案内板によると「当地方第一の古刹、奈良時代は「法相宗」であったが35代630年の後、法相真言兼学となり、後「真言宗」となった。特にキリストン宗門の起請文と十字架、郷目の三幅一対、宝篋印塔、板碑等は、考古資料として注目されている。」とあります。称名寺の創建は天平18年(746)、奈良時代の高僧である行基菩薩によって開かれたのが始まりとされます。伝承によると行基菩薩は十王像を笈で背負って来たとされ、その故事が転じて地名の「十王」が起こったと伝えられています。当初は法相宗の寺院でしたが、永和元年(1375)に高野山(和歌山県伊都郡高野町:真言宗総本山)の僧、我光和尚により真言宗兼学となっています。(山形県の町並みと歴史建築サイトより抜粋)
西置賜郡白鷹町十王3527



■薬師堂 詳細不明 2024年に道路拡幅工事で10m東に移動。

■太松院 詳細不明 曹洞宗 白鷹町大字深山字西向4110

■大沼の浮島(弁天島) →→28.984km→→ 川口寺推定地 →→→ 28.984km→→ 延寿寺
→→→ 28.984km→→ 出塙文殊堂
→→→ 28.984km→→ 富神明神社
→→→ 28.984km→→ 馬頭観世音堂

■延壽寺

法華經と黒滝不動明王への信奉により明治三十三年に開山。当山二世・秋葉栄山の母タヨが夢告によって滝平地区の三階滝付近を探索したところ、滝壺の底に黒滝不動尊の姿をみたという。当時、同地区では火災業病が絶えず、この折伏を願って法華經を奉じ、不動尊を祀ると火難は収まり、以降、地元を中心に熱烈な信仰が広まった。昭和五十八年本堂、庫裡を新築。また、奥の院と三階滝の不動尊の社では、滝祭りの行事を現在も厳修している。山形市滝平832-2

■出塙文殊堂

出塙文殊堂は出塙の文珠山中にあります。本尊は大聖文殊(文殊菩薩)、祭日は7月25日(旧暦6月25日)。もとは文珠山の山頂にあったとされ、山形初代城主・斯波兼頼公(最上氏の祖)が延文元(1356)年羽州探題として山形城に入部した後、中腹の現在地に移し、堂宇を再建したとされています。堂宇は、その後も正徳3(1713)年に再建されています。

■富神明神社

当神社はきれいなピラミッド型をしている「富神山」(標高402m)の南麓に鎮座しており、「富神山(に宿る神)」を祀った神社と考えられている。昭和52年に圃場整備事業に伴って行われた発掘調査

によれば、当神社社殿を中心に半径20～24mの環状列石が発見された。そのほかに、石器や土器片なども出土しており、縄文時代後期頃の遺跡とされた。環状列石については、未発掘部分も多く詳細は不明ながら、土坑など埋葬の跡が発見されていないこともあり、祭祀施設と考えられている。なお、当神社の御神体は約1mの木造の男神像で、鳥帽子や袍などを着用しており、14世紀頃の作と推定されているという（非公開）。なお、「日本三代実録」貞觀13年（871年）条に「出羽国の利神に従五位下の神階を授与した」という記事があるが、一説に、その「利神（とのかみ）」が「富神山」の神であるという。（サイト「神が宿るところ」より抜粋）



●富神山は出雲族富家の神奈備山だと思う。その祭祀場が富神明神社。そうとうに古い聖地とつながりがあつてホッとした。それにしても山形にも環状列石（ストーンサークル）があったとは知らなかつた。

■馬頭観音堂 詳細不明 上山市下生居828-2

■川口寺推定地→→33.383km→→ 大谷金輪寺跡 →→→ 33.383km→→ 龍雲院

■龍雲院

詳細不明 曹洞宗

県指定文化財の絹本着色釈迦十六善神図を所蔵。

この画幅は3幅1対で、中央に釈迦如来、左右の幅に十六善神・文殊・普賢両菩薩、常啼（じょうたい）菩薩と大迦葉、玄奘三蔵と深沙大将（じんじゃだいしょう）がそれぞれほぼ左右対称に描かれている。

中央幅の釈迦は、衲衣（のうえ）部に截金で卍字つなぎ、蓮華唐草・亀甲・麻の葉つなぎなどの文様をあらわし、手印は右施無畏（せむい）印、左与願（よがん）印の坐像で、釈尊の裳裾が、蓮華座の左右の端より長く垂下するところに特色がある。

彩色も朱・緑青・群青・金泥などを用い、着衣・甲冑・武器・頭髪や髭まで丁寧、巧みに表現している。京の優れた絵仏師の手によるもので、鎌倉後期の作と推定されている。

南陽市竹原655-1

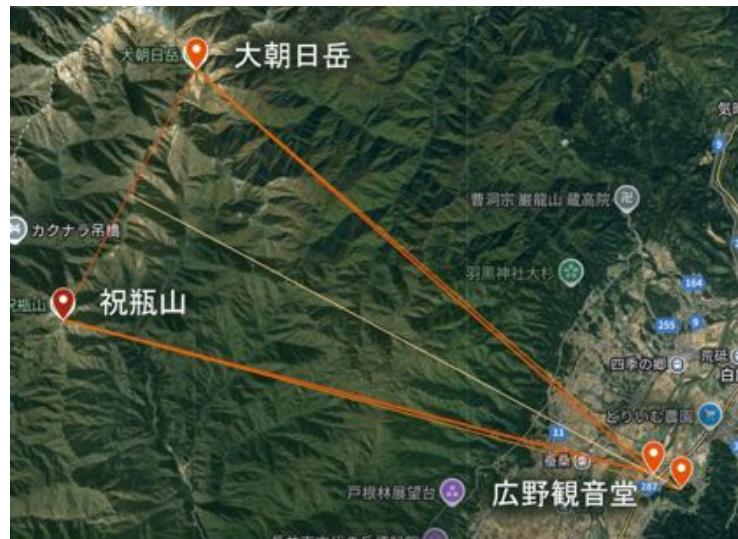


●龍雲院の開基がいつかはわからないが、鎌倉時代の絵が遺されている。裏山は龍樹山というらしい。龍樹菩薩が祀られているのだろうか。大谷金輪寺は1500年頃まで存在していたので、龍神つながりがあったのかもしれない。

●由緒のわからない神社仏閣のつながりが多いのは、朝日岳信仰の衰退から800年近く経つからだろう。必要ななくなった社寺はどんどん小さくなつて忘れられてしまうのだと思う。

●岩上寺跡地は三階滝神社のあたりだろうか。いつか改めて探し出して追記することにする。

●単純に大朝日岳と祝瓶山の合わさり目には、どんな神仏が祀られているのか調べてみた。



■大朝日岳→→ 17.184km→→ 広野観音堂 →→→ 17.184km →→ 祝瓶山

■広野観音堂

置賜三十三観音 第22番（真言宗）観音堂の建立は宝永2年。寛永5年に開村された広野村の信仰の中心として建立されたと伝えられる。本尊は聖観世音菩薩立像。米沢の法音寺から寄進されたもので、長楽寺に仮安置したところ同寺の本尊である聖観音とケンカをして右腕に包帯をしているという噂が立った。現在も手の病に御利益があるとされている。創建：1705年（宝永2年）白鷹町広野 2676

●ときめいたが創建は1705年と新しい。他には見つからなかったが後方の山が気になった。独立した一山となっていて、左裾には小山も二つ。ピラミッドぽい。こういう山には必ずなにかしらの神様が祀られているはず。国土地理院の地図で山頂部を確かめてラインを伸ばすとうまくつながった。近くの立岩七星両神社と諏訪神社にラインを伸ばすとちょうど山頂部を横切る。古い時代の祭祀場があったのではないかだろうか。現場検証の際、山をぐるっと回ってみたが登り口や看板は見当たらなかった。

■大朝日岳→→ 18.047km→→ 山頂（名前不明） →→→ 18.047km →→ 祝瓶山



●最後に浅立の諏訪神社が気になったので、ざっと調べてみた。江戸時代初期の創建なので朝日岳信仰はすでに衰えていたはず。なぜ諏訪神社を建てたのか?

『三大実録』には貞觀地震の折に「出羽国の白盤神と須波神に從五位下を授けた」とあるが、須波神は朝日岳のことと龍蛇神の諏訪神とされている。山形の諏訪神社は大朝日岳の見える位置に建てられていることが多いと感じている。このことについては、改めて調査してみようと思っている。



■大朝日岳→→ 17.184km→→ 栗木沢二渡神社 →→→ 17.184km →→ 浅立 諏訪神社

■大朝日岳→→ 17.184km→→ 富沢天満神社 →→→ 17.184km →→ 浅立 諏訪神社

■大朝日岳→→ 17.184km→→ 木の沢羽黒神社 →→→ 17.184km →→ 浅立 諏訪神社

■浅立 諏訪神社

諏訪神社の創建は慶長17年(1612)、沼沢伊勢が諏訪堰の大事業を完遂すると、神意に感謝し諏訪大社(信濃国一ノ宮)の分霊を勧請して当地の守護神にしたのが始まりとされます。現在の諏訪神社本殿は宝暦12年(1762)に再建されたもので一間社流造、向拝の木鼻や外壁の欄間、妻面、懸魚などに精緻な彫刻が施され、江戸時代中期の神社本殿建築の遺構として貴重な事から白鷹町指定文化財に指定されています。

例祭に奉納される「蛇頭の舞」と呼ばれる獅子舞は諏訪神社に伝わる**大蛇信仰**を体現したもので、昭和45年(1970)に白鷹町指定無形民俗文化財に指定されています。

祭神：建御名方命。社格：郷社。（山形県の町並みと歴史建築サイトより抜粋）

西置賜郡白鷹町浅立 3936

■栗木沢二渡神社

河川舟行の守護神として祀られたのだろうと考えられています。地区民にとっては風邪の神やとりしゃぶき（百日咳）の神としても信仰されています。町内で二番目に古いとされる享保7年の「繫馬図」があります。「大谷郷」より抜粋 西村山郡朝日町馬神 256

■富沢天満神社 詳細不明 西村山郡大江町大字富沢 119-2

■木の沢羽黒神社 詳細不明 寒河江市柴橋 3002-1

●詳細不明な神社ばかりだけれど、このあたりは大谷の菅原道真の側室一族が祭祀をしていたエリア。大谷は金輪寺のある朝日岳信仰の一大拠点の場所。朝日岳を祀る諏訪神社にとって関わりがあったとしても不思議ではない。栗木沢二渡神社は、菅原一族の大谷天満宮や朝日岳信仰の大圓寺ともつながる大切な神社だから、これにより大谷・大沼からの朝日岳信仰の祭祀線とつながる。

■大谷天満宮跡 ←→ 1.531km ←→ 大圓寺跡 ←→ 1.531km ←→ 二渡神社（栗木沢）

富沢天神宮も菅原一族が関わっての建立に違いない。そして、朝日岳信仰・葉山信仰を抑えて隆盛を誇った羽黒信仰の羽黒神社ともぬかりなく繋がっている。訪ねてみると、鈴でなく立派な鰐口がぶら下げてあり、羽黒権現社時代を想像させられた。朝日岳信仰は衰えても祭祀線は生きていることがわかった。

●なぜ平安時代に朝日岳を須波神（諏訪神）と呼んだかの考察は、別頁「伊勢・志摩の神々の祀られ方」をご覧いただきたい。簡単に説明すると、伊勢志摩は朝日岳と諏訪湖を結んだ場所に造られた聖地だから。伊勢志摩から諏訪湖を望めば、その後ろに朝日岳がある。

●まとめ

祝瓶山に多くの寺社がエネルギーを注いでいたことがわかった。

藤原時平に無実の罪を着せられ、弁明は一切聞き入れられず囚人同様の扱いで太宰府に幽閉され、わずか2年で非業の死を遂げた菅原道真公。征夷大将軍の攻撃を受け続けた蝦夷出雲族の地と血。道真公の子孫や追いやられた出雲族たちが働き、ここ朝日岳修験と天拝山の双方から、世直しとして清涼殿を襲った。

20年以上前に、同じ朝日岳のふもとで大谷からも近い大江町黒森の「雷神社」で細長い絵馬を見つけていたことがあった。一目で清涼殿落雷事件の絵だと思った。左に天拝山らしき山の上に、霞に乗って浮かんでいる道真公。真ん中に宴に興じる藤原家、右側に火炎をまとった大朝日岳の大龍が息を吐き襲うとしている（推測）。きっと言い伝えを絵に残したのではないだろうか。写真が見つかったのでご覧いただきたい。道真公の顔は真っ白だが微笑んでいるように見える。私には「その時」を表しているようにしか見えない。



きっと道真公



藤原家



大朝日岳の龍神



■天拝山荒穂神社 磐座 511.299km — 清涼殿 — 祝瓶山（朝日連峰）511.299km

●8年前に調べた時は10m単位の計測ソフトだったので改めて距離を測ってみた。400kmを越すと円形を描けないソフトだが距離だけは測れる。祝瓶山三角点から清涼殿跡地までは511.299km。今度は清涼殿跡地から天拝山の511.299kmの地点をチェック。すると、荒穂神社の社殿より10m後方にずれてしまう。



しかし、ブログ「まにまに。」さんの写真を見るとわかるが、荒穂神社の拝殿は巨大な磐座にめり込むように建てられている。本殿は磐座そのものと言える。



ブログ「まにまに。」さんより写真借用

●前述の富神山の祭祀場はふもとのストーンサークルの真ん中にある富神明神社だった。大朝日岳は同じ朝日連峰の一つで少し低いが尖った山の祝瓶山が祭祀場。同じように天拝山は中腹にある磐座の荒穂神社が祭祀場ということになる。

■天拝山荒穂神社

祭神 五十猛命 福岡県の説明板『筑前続風土記』には、荒穂神社は、現在佐賀県三養基郡基山町宮浦にある荒穂補明神を招いたもので、一説にはニニギノミコトを祭神とするが、本来は五十猛命であるとされている。また宮浦荒穂明神が一夜のうちに馬上空を飛んで、この岩間に鎮座したともいわれている。筑紫野市の説明板『筑前続風土記』には昔、宮浦の荒穂明神は城山（基山）の上に坐り、基肆城をとりまく山々に五十猛命が祀られたことがわかる。

社殿の上部に磐座が見える。何故、中腹以上で頂上でもない所に神社があるのかが不思議であるが、かっこうの磐座があるので、ここが神祭の場となったのであろう。

<http://kamnavi.jp/it/tukusi/tenpai.htm>

●ちなみに、こんな祭祀線もある。

■日吉神社 →→519.205km→→平安京大極殿←←←519.205km←←大朝日岳

日吉神社

最澄は、延暦二十四（八〇五）年、唐から帰朝の折に筑紫で最初の天台派寺院たる背振山東門寺を開基。これを比叡山延暦寺に移した時に、その守護神としてこの山王神猿田彦命を勧請して滋賀県に日枝神（日吉大社）を創建したと言う伝説が残っている。福岡県筑紫郡那珂川町

猿田彦命は出雲三神（岐神・幸姫・猿田彦命）の一人。朝日岳は龍神の山であり、出雲族が昇る太陽を拝んだ場所。出雲族の菅原道真公一族が平安京を護るためにさまざまな祭祀線を配置して右大臣になったはず。祭祀線は相互関係であり、プラスにもマイナスにも作用させられる。菅原一族が逆に使って藤原家に報復したのではないだろうか。

詳しくは別頁「藤原家を襲った菅原道真」をご覧いただきたい。

●せっかくなので絵馬のあった黒森雷神社の祭祀線もあらためて調べてみた。



- 達磨八幡神社 →→19.437km→→黒森雷神社←←19.437km←→大朝日岳
- 黒森雷神社 →→6.678km→→大沼の浮島（弁天島）←←6.678km←→高松寺
- 黒森雷神社→→9.449km→→大谷金輪寺←←9.449km←→龍源寺

●祭祀線は四つ見つかった。大朝日岳や大沼弁天島、大谷金輪寺と繋がった。西川町沼山の龍源寺は大谷の菅原（白田）一族の分家が移り住んだ土地なので辻褄が合う。しかし、どれもわりと新しい歴史。一つだけ興味深い祭祀線が見つかったのが龍源寺とも同距離になる慈恩寺である。



- 黒森雷神社→→9.449km→→大谷金輪寺←←9.449km←→慈恩寺 宝蔵院・華蔵院

■慈恩寺

行基によって見い出され、聖武天皇の勅によって創建したとされる。その後、鳥羽天皇の勅で再建され、後白河法皇と源頼朝によって山号を与えられた。平安時代は荘園領主である藤原摶関家から、鎌倉時代から室町時代にかけては地頭・寒河江大江氏の庇護を受け、寒河江大江氏が滅ぶと最上氏や江戸幕府によって寺領を認められた。

江戸時代には東北随一の御朱印地を有し、院坊の数は3ヵ院48坊に達した。修験による祈願寺として御朱印地を拝領していたため檀家を持たず、明治の上知令により一山は困窮して帰農する坊が続出した。現在は3ヵ院17坊を伝える。

本尊は弥勒菩薩で、脇侍として地蔵菩薩、釈迦如来、不動明王と降三世明王を配する日本国内でも珍しい五尊形式である。創建当初は八幡大菩薩を鎮守神として祭っていたが、時代の変化とともに法相宗、真言宗、天台宗を取り入れ、現在は天台宗真言宗兼学の一山寺院として慈恩宗を称する。

慈恩寺は3ヵ院48坊からなる一山寺院を形成し、鎮護国家、除災招福を祈願する寺院であった。一山を代表する支配職は、真言方は宝蔵院・華蔵院、天台方は最上院の3ヵ院で、所属の院坊をまとめ、幕府など大檀那への年礼を主とした。現在は3ヵ院17坊が一山を支える。寒河江市慈恩寺

■宝蔵院 言宗 真言方学頭

配当高109石余。学頭1、衆徒11院坊、家来8、借地6、102軒、ほか末寺、本道寺・大日寺など21。（享保6年『拝領高并人数帳写』）胎蔵界大日如来坐像、金剛界大日如来坐像、不動明王像多数、千手觀音

立像、地蔵菩薩立像、軍荼利明王立像、竹内坊文書などを保有。

■華藏院 真言宗 真言方學頭

配当高219石余。学頭1 院坊11、末寺7。（文政12年『華蔵院本末改帳』）不動明王立像多数、三十三觀音像、胎藏界曼荼羅、八大高僧図、仏典・經典などを保有。



●慈恩寺は2014年に国の史跡に指定された。興味深いのは慈恩寺を支配する三力院のうち真言系の2力院（宝藏院と華藏院）の屋根を通った。慈恩寺は歴史に翻弄され真言宗・天台宗兼学の寺院となっているが元々は真言宗である。この祭祀線のためにこの位置に建てたのではないか。

- 道真公が亡くなつて 27 年後の 930 年に清涼殿落雷事件、その 5 年後に平将門は怨霊菅原道真（菅原一族）とともに東日本に再び独立国を作るべく将門の乱を起こした。しかし残念ながら、朝廷が呼びかけた全国の寺社からの呪詛攻撃により乱は失敗に終わつてゐる。詳しくは別頁「平将門の乱」を。

●長いレポートにお付き合いいただきありがとうございました。



●川口寺跡推定値はこちらです。長井市文化財担当課様、ぜひ発掘してください！



(2025. 5. 20)

●追記:20年ぶりに黒森の雷神社を訪ねてみた。隨神門前の鳥居は倒れ、社殿は朽ち、床は落ち、廃神社となっていた。長い歴史の終わりの時を労う思いでしつかり見届けてきた。あの絵馬は外されていたが、どうやら大江町教育委員会で保管している情報が入ってきてホッとした。

(2025. 5. 30)

